

大商大の実践を当てはめると

CASE 01 | 大阪商業大学バスケットボール部 育成プログラム

当時の現在地

勝利や上下関係が先に立つと、
選手が自分の意思を持ちにくい

練習 2時間半／休日 週1回／国内合宿 年2回
という慣習も、目的から見直しました。

目指した景色

世に役立つ人物の養成

大学の建学理念を、
「強く優しい人材を育てるチーム」へ

ハッと育の進め方として整理すると



「教えない」は、放っておくことではありません。

答えを先に渡さず、夢中になれる材料と、ハッとする比較・問い・データを用意する。
選手が自分で選び、動き、結果を自分の力として受け取れる環境を設計しました。

この事例に見える「3回の受容」

- 受容①

選手の主張を受け止める
- 受容②

考えが違って、納得するまで話す
- 受容③

本人が選んだ挑戦を、制度とデータで支える

6つの改革を、仕掛けとして見る

命令を増やすのではなく、選手が気づき、自分で動ける条件を組み替えました。

1

朝練を「任意」に

仕掛け

補習・強化の場を、来る／来ないも含めて選べるようにした。

変化

継続した選手が大きく伸び、ボール運びが安定。3ポイントもチーム1位へ。

武道の知恵

脳科学

2

練習 150分 → 90分

仕掛け

時間の長さではなく、目的・集中・プログラムの質を問い直した。

変化

一つひとつのメニューへのこだわりが向上。

3の法則

表裏一体

3

休日 週1回 → 週2回

仕掛け

休息・学業・生活も成長の一部として、余白を増やした。

変化

やらされる練習ではなく、自主練をする選手が増えた。

表裏一体

心のともし火

4

国内2回 → シアトル1回

仕掛け

同じ20万円を、格上・文化・仕事・人との違いに触れる一回へ。

変化

世界との差と自分たちの現在地を、体験から考えられた。

違いから現在地を知る

繋がる

5

主張を受け止め、対話

仕掛け

コーチの答えを押しつけず、選手が納得するまで話した。

変化

意見と意思を持つことが尊重され、「やりに来る」感覚へ。

インディアンの教え

リッツ・カールトン

6

分析と必要な選手像を公表

仕掛け

対戦相手の分析、役割、選考基準を選手に見える形にした。

変化

自分の現在地と、チームにどう貢献できるかを考える材料に。

違いから現在地を知る

3の法則

変化を、感想だけで終わらせない

行動・技術・関係・チームプレーを記録し、5 VALUESで次の一步を考えます。

技術

朝練継続選手

ボール運びが安定
3ポイントがチーム1位へ

主体性

休日を増やした後

自主練をする選手が増加

設計

練習を90分へ

プログラムへのこだわりが向上

チーム

全関西2018・3試合

得点に対するアシスト数の比率
21.1%／20%／22%

※上記は当時資料と西田さんの記録から確認できる変化。改革との因果を示すには、前後比較や本人の証言を追加します。

5 VALUESで振り返る

尊重

主張を聴き、
納得まで対話

創造

90分練習と
海外体験を再設計

成長

出欠・シュート・
ゲームを記録

自由

任意朝練と
自主練の余白

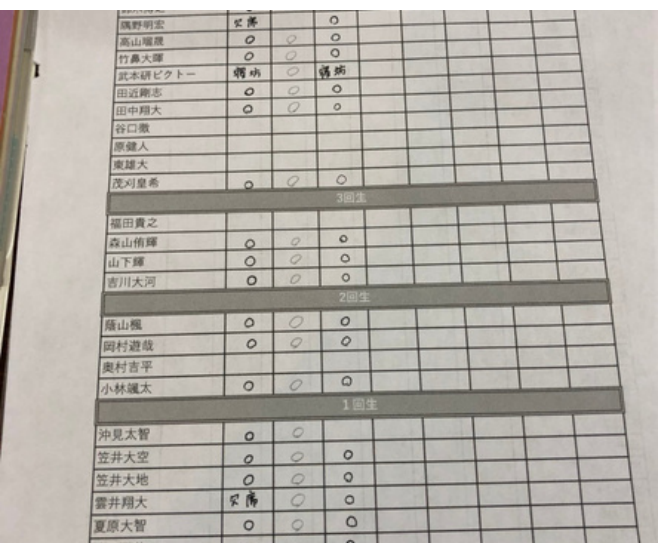
平等

役割と選考基準を
見える化

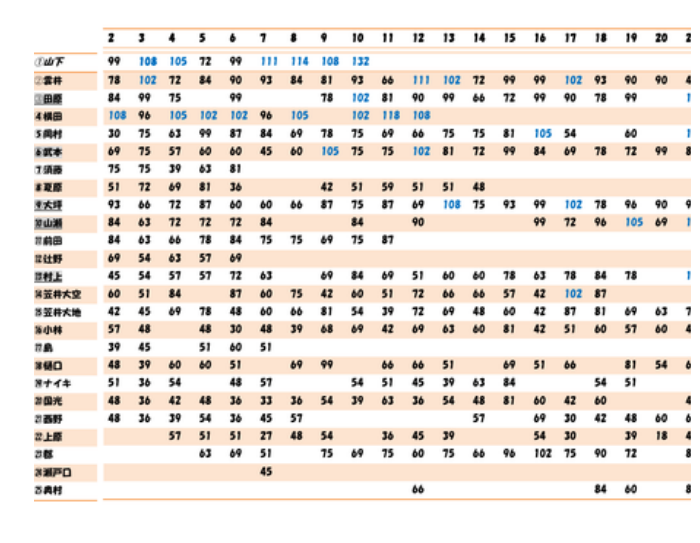
1 IDEAL | 平和

強さだけでなく、互いを尊重し、次の人を支えられる「強く優しい人材」へ

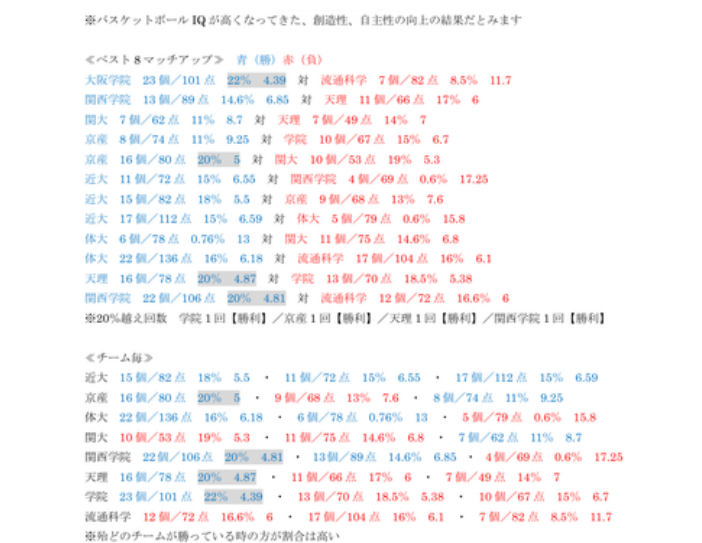
すでに残っている検証材料



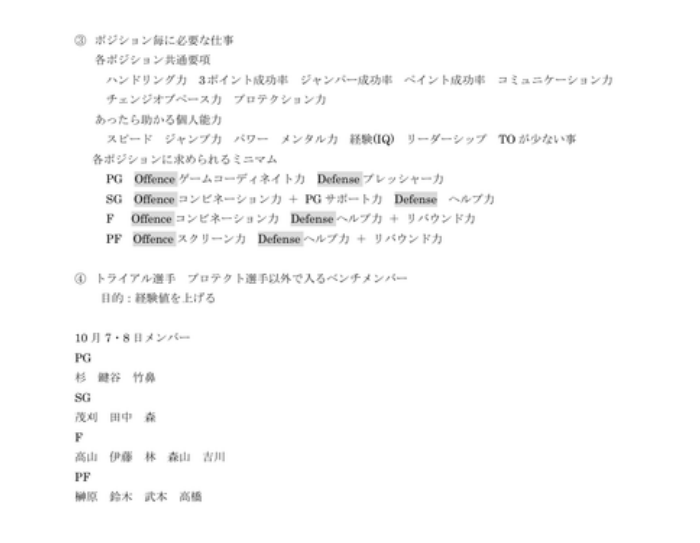
出欠表



シュート記録



ゲームデータ



選考基準

今後必要な資料

選手・OBの声
前後の数値比較
自主練頻度／継続率
保護者・職員アンケート